

【 第8回アジア太平洋ろう者競技大会を振り返ってⅣ 】

準優勝した後は、嬉しい気持ちよりも安堵の気持ちが大きく、帰国後は2週間分の自分の仕事と、11月と12月に行われる合宿準備などでゆっくりすることができなかつたのですが、今回の大会を振り返りながら4回にわけてコラムを書かせていただきました。全ての試合をゆっくりと見直した時に、デフリンピック出場権をかけて戦った準決勝の韓国戦後や、ゴールする度に協会スタッフの喜びの声や感情が入り交わった時、若い時は選手として、現在はスタッフとして日本ろう者代表の為に戦ってこられ、ここまで協会を支えてこられた思いが詰まっていることがなんともいえない嬉しい気持ちになりました。

「尾上前監督」(2005-2009)、「柴田前監督」(2009-2013)と歴代の監督が指導した2005年から見ている私は、この8年の期間を引き継ぎ、今日までの10年間の賜物が現在の結果になっております。

決勝戦では、「古島」のCKを「竹内」がヘッドでゴールへ突き刺す均衡を破るゴールが生まれました。実際にはとても速いボールでしたが、私の視点の中ではスローモーションの映像のように見え、その瞬間、ゴール！自分の中では冷静だと思っていましたが、イランの逆襲により同点に追いつかれるまでのこの7分間、勝ち切るための指示が伝わりきれていなかったのが、反省部分です。また、この決勝戦で日本は負傷によりすべての交代カードを切ったが、

戦術的な交代をしたイランとの勝負の分かれ道はここにあったのではと今でも考えます。

準決勝や決勝戦などを観戦した方々から「日本代表選手はイケメンが多いですね」とたくさんの方々から言われる中で「江島」が一番人気でした。オフの日を含め自由時間が少ない中で、「メダルが一番のお土産になりますので気にしないでください」彼の一言にすごく救われた気持ちになりました。そうした一面を垣間見て、彼は内面も男前やなと感心しました。チームをまとめた主将「細見」は、非常に真面目で開会式の日本選手団の旗手を務め、開会式の間も動かず話をしっかりと聞いていた唯一の選手ではないでしょうか。彼は全選手のことを良く考え自分のことよりもチームのこと人のことを優先し考えられるやさしい性格で、長年の代表経験を生かして何時、如何なるときも気配りしてくれた彼は、間違いなく日本代表の精神的支柱でした。

尊敬する先生がいつも言っています「人のために」という言葉は、言葉では簡単に言えてもなかなか心から思うのは難しいですが、今回の大会では参加選手、協会スタッフとも思いが一つになり、チームのために、人のためにと思い戦えたからではないでしょうか。今大会期間中では試合や練習を重ねるごとに選手と共にチームが成長する毎日が楽しくて仕方ありませんでした。天気もグラウンドも試合の順番もすべてこちらの思うように進んでいく感じでした。これも「高橋名誉顧問」、「佐藤前会長」、「川畑前副会長」、「鈴木会長」、

「小林副会長」といった、協会スタッフの方々が一人何役もこなしながら、サポートして下さった結果です。特に「小林副会長」には豪州のDFの選手と驚くほど似ていたので、試合前に豪州対策としてDF役に協力して頂けたことが印象深かったです。我々コーチングスタッフも「前田コーチ」、「植松コーチ」、「田澤テクニカルアドバイザー」で構成されていますが、貢献する形は異なってもそれぞれが情熱を持って献身的にチームを支えてくれました。

また今大会の決勝戦では、スタンドから大勢の方々がくれた声援が大きな力となり、選手たちの闘志を奮い立て、最後まで戦い続けることができました。そして試合後に、応援して下さった日本選手団、運営して下さったスタッフ、いろんな国の方々からたくさんの温かいお言葉を頂きました。サッカーは人の心を映し出します。サッカーが上手いだけでは人の心を動かすことはできないと思います。内心から出る熱い想い、不屈の精神が伝わってこそ、はじめて人の心は動きます。日本代表選手とスタッフ全員が「和」となり、100%以上の力で戦ったからではないかと思います。

2016年6月イタリア大会が開催されます。まだ7ヶ月ある、もう7ヶ月しかない、人によって感じ方は違いますが競争・強化はもう始まっています。次から頑張ろうではなく、今を頑張れない人は次も頑張れません。アジアで優勝、世界でメダルをとる為にはすべてにおいてレベルアップが必要です。トレーニングは毎日の生活の中での積み重ねで、食事・睡眠も大切です。代表

活動は回数が限られますが、代表活動外の期間でも彼らの成長を見ることを楽しみにしております。

